

素朴な優しさ

古浜悦子

春の陽の匂いのする蓬だんごを
一つもらって食べた

近所のおばあさんの作った蓬だんご
これは買ったものではない
なんて温かいのだろうか嬉しかった

さびしさの極まる時

土や草

そんな素朴なものに眼がいく
友として語りかけたくなる

おいしい

おいしいけど寂しい

そして背負いかねる重荷を

終わりにしたいと

土手いっぱい雑草が

強い風になびいているのを

もつともつと強い風が吹けよと眺めている

そう、伝わらない想いなら今流れてしまえよ

呪文のように繰り返し呟いている

たった一つの蓬だんごを頬張りながら

怒って泣いて感謝した

それでもおいしいじゃないか

プラマイゼロになった気分で

少し元気がもどった

歳のせいだろうか

時々自分を燃やせずに

セピアな小箱のなか

逃げている

美しいものを

正しいものを求めてきたはずなのに

当たり前のことができなくて今とても歯痒い